

ビジネス パーソナル & スポーツ パーソナル

丸山 博司
Maruyama Hiroshi

企業が求める人材

シバブックス
SIBAA BOOKS

スポーツパーソンにこの本を推薦します

筑波大学バスケットボール部監督の吉田でございます。

筑波大体育会学生バスケットボール部ほかは今年で5回目になりますが、毎年3月、男女、新4年生、3年生、監督、コーチ、マネージャー、部関係者を含め約50名～60名程度を対象に丸山先生の講話を就活セミナーとして受講しています。

そのセミナーを本にして出版されると聞き、非常に喜んでいました。

学生は、このままスポーツを続けていて社会に出て役立つのだろうか。就職出来るのだろうか。そもそも会社とはどういう仕事をしているのだろうか。スポーツをしていることが役立つのだろうか。と不安を感じています。

そしてまた、どのスポーツもそうですがプロ化が進み、第2の就職、セカンドキャリアを心配する人達が多くいるのが現状です。

そうした、たいへん大きな不安に答えて、丸山先生の貴重なスポーツと仕事の経験から得た現実的な、具体的な打開策、進むべき道を示唆しているがこの本だと思います。

いまスポーツ界はプロ化、事業化がすすみ、スポーツ振興には素晴らしいことですが、反面スポーツ関係者が社会的問題を起こすことが少なくありません。

少しオーバーですが、スポーツ界への警告として、スポーツパーソンの導入教育に役立てばと、スポーツに取り組む心がけまで書かれています。スポーツパーソンに読んで勉強になる本として推薦したいと思います。

筑波大学バスケットボール部監督 吉田 健司

(全日本大学バスケットボール選手権大会2015・2016・2017年三連覇の筑波大学バスケットボール部監督)

読者の方々へ

本書は二〇一八年一月二七日に開催された「エス・イー・シーエレベーター株式会社（以下SECエレベーターと略記）第四九期第二回全国勉強会」における講演をもとに文章化し、さらに大幅な加筆、修正などを加えて再構成したものです。話し言葉を基調としているのはそのためです。このときの講演タイトルは、本書のサブタイトルにもなっている『企業が求める人材』でした。

この講演タイトルにあるように、社員研修用として多くのビジネスパーソンに読んでいただきたいと願ってやまないと考えています。それと同時に、私としてはぜひ多くのスポーツパーソンにも読んでいただきたいと思っています。ビジネスの世界に半世紀以上にわたってかかわってきた私ですが、学生時代から同じく半世紀以上にわたってスポーツの世界にも深くかかわってきました。こうした考え方はその経験から生まれたものにほかなりません。

最近スポーツ関係者によって引き起こされる社会的な問題が散見されます。その背景には、スポーツでプロ化、幼児化（五〜六歳）が進み、スポーツ振興が推進されている動向があります。このことが各分野での発展に寄与していることは喜ばしい限りですが、その半面で、スポーツ一辺倒に専念できる優遇的な環境に甘えている関係者が多いのではないのでしょうか。そして、指導する側も唯我独尊で、勝利第一主義に走るあまり、文武両道の心得、心技体の調和を教える機会が少ないように思われます。

一般の人が社会人としての常識を身に付けるために勉強している時間を彼らは練習と試合に当てている。「一日の三分の一は睡眠、三分の一は仕事か勉強、三分の一は生活と遊び」というのが一般人であれば、「三分の一は睡眠、三分の一はスポーツ、三分の一は生活と遊び」では失格で、「生活と遊び」の時間を削って社会人としての常識を身に付けるための勉強をしなくてはなりません。果たしてその覚悟ができているのでしょうか。

スポーツに専念できるのは、たくさんの人々の物心両面の支援があり、練習や試合のための施設を膨大な費用で造り維持している国をはじめとするバックアップがあつてこそです。それゆえにこそ、私はスポーツパーソンは公人であると断言してはばかりません。ま

た、それゆえにこそ、公人らしく自覚と誇りを持ってほしいと望んでやみません。

特に現在、体育会系の学生など専門的に打ち込んでいるスポーツパーソンの間でセカンドキャリア（スポーツをリタイアしたのちの第二の人生における職業）を心配する人たちが多いように聞きます。安定化したセカンドキャリアを得るためにも、この本が参考になればと思っています。

いずれにせよ、企業が求める人材、社会が求める人材、スポーツ界が求める人材、すべて共通です。本書で詳しく述べる「八つの能力」を兼ね備えた常識人であり、考えることができる人材であること。これに尽きます。

本書で私がつとも伝えたいことは、この「考える」ことの大切さです。では、どうすれば考えることができるようになるのか。答えは簡単です。思考力を付けることです。では、どうすれば思考力を付けることができるようになるのか。また、思考力が付いたら、次にどのような論理思考、どのような論理過程、どのような手段で考えていけば目標が達成できるのか。これらを具体的事例を示しながら追求し、「考える」ことを深く掘り下げたつもりです。

その意味で、この本をビジネスパーソンのみならずスポーツパーソンを対象にした導入教育のテキストとしても供すること、人間として物事を広い視野で考えられる、そしてそれを実行できる、紛うことなく社会に貢献し得る人材の輩出の一助になればと祈念する次第です。

※本書では、一部を除いて、サラリーマンやビジネスマンを「ビジネスパーソン」、スポーツマンを「スポーツパーソン」という用語に統一することを原則にしています。

はじめに

二〇一四年四月七日。SECエレベーター鈴木孝夫会長七一歳の誕生会にお招きいただきました。その席で私が述べた祝辞の要旨をここに紹介します。

十数年来仕事を通じてそのお人柄に親しく接する一人としていつも感じていることは、鈴木会長は社員のことを常に考え、人の話をよく聞かれ、会社が困っていることは何だということ絶えず追求し、明るく前向きに挑戦しておられることです。その姿勢には大変に感心させられます。

いま日本は、少し豊かになり現状維持派が多く保守的な考え方が強くなり、改革のスピードという点では諸外国から遅れているのではないでしょうか。エレベーターメンテナン

ス業界においても、大手会社の寡占と保守的な体制が続いていました。そんな中、SECが革新の風穴を開け、社会から高い評価を得た。この点について前々から尊敬していましたし、会長の日頃の姿を見て、なるほどなと感心しているところですよ。

トヨタ自動車名誉会長の豊田章一郎氏はかつて「メーカーとして、ものづくりを通じて社会に貢献するには、創造・挑戦・勇気が必要だ」と述べられました。鈴木会長はまさにこの創造・挑戦・勇気を実践しておられるように思います。

“日本資本主義の父”と称される渋沢栄一氏は、かつて「四〇、五〇歳は洩はな垂れ小僧。六〇、七〇歳は働き盛り。九〇歳になって迎えが来たら、一〇〇歳まで待てと追い返せ」と言われたそうです。この偉人のひそみに倣ならって、ますます元氣でがんばってください。

このとき述べた私の考えも、鈴木会長のお人柄も、いまもってまったく変わりがありません。実は、私が大学で『企業が求める人材』と題した就活セミナーを十数年来続けていることを鈴木会長にお話しし、その内容をかいつまんでご紹介したところ、それは自分が常日頃社員に話していることと同じだ、とご賛同いただきました。

そのとき披露していただいたひとつに同社社訓があります。

社訓

- 一つの感謝を終生忘れぬ事
- 一口の言葉を囁み締める事
- 一つの行儀の挨拶から行動に移る事
- 一つの貨幣の重さを尊く思う事
- 一握りの食物をも無駄にしない事
- 一段ずつの階段を昇りきる精神を養う事
- 一つ手前の能力を出しきる事
- 一つの安らぎを素直に受ける事
- 一つの苦しみを反省の念にする事
- 一つの行ないが万人に尊敬される事
- 心と行動と敏速が答である

鈴木孝夫

はじめに

もうひとつ披露していただいたのは「鈴木語録」と呼ばれているメモです。これは鈴木会長が日頃よくお話しになつてゐる内容をまとめたものということでした。

- 一、求められる人間、求められる会社、求められる国でありたい。
- 一、挨拶は相手の目を見ながら、真心をこめて、明るく、大きな声でする。
- 一、情熱をもってやり遂げた仕事は人生の喜びでもある。
- 一、相手の気持ちを理解するには、日々の研鑽と鍛練が必要である。
- 一、あらゆる局面を想定して実行した成果は、物欲よりも満足感を得ることが出来る。
- 一、真実で目的をやり遂げた場合は企業と人間を更に成長させる。
- 一、競争社会を勝ち抜く為には、日々の努力と改革が必要である。
- 一、黙っている事は嘘の根源である。
- 一、社員一人一人が会社を代表する気持ちで業務に専念する事。

そのあとで、ぜひ社員研修の場であらためて講演してもらえないだろうか、との要請を承りました。本日この場に立たせていただいたのはそういういきさつがあつてのことです。

SECエレベーターの会社説明の中に「鈴木会長は創業以来社員教育を欠かさないと、いう一節があります。そんなすばらしい会社の社員のみなさんに本日講演できることは、名誉であり光栄に存じます。ご期待に応えられるよう内容の濃い中身にしたいと思つていきます。

目次

読者の方々へ	3
はじめに	7
不確定時代にどう生きるか	16
(1) 第三の道	20
(2) 「エゴ」と「エヴァ」	22
(3) 資源は有限	24
(4) 国際機関の弱体化	25
(5) 強国一極集中	25
(6) 文明の衝突	27
(7) 過度な数値化、基準化	27
(8) 金融通貨、資源、核戦争	28

目次

(9) データの時代	29
不確定時代にやることは	30
(1) 原点に戻り差別化できるもの	32
(2) 明確な目標と準備	34
(3) 良好な人間関係とコミュニケーション	35
個人に考えさせていること	36
社会常識と礼・信・仁・義	42
(1) IT	43
(2) 人脈	48
(3) 新聞	48
(4) 月刊・週刊誌	48
(5) セミナー	49
(6) 本	49
(7) テレビ	50

企業はどういう人材を求めているか	51
人間関係、視野・識見、職務知識を身に付ける	56
(1) 人間関係	57
(2) 視野・識見	59
(3) 職務知識	61
テレビから何を学ぶか	64
本を通して歴史と賢者に学ぶ	68
資格をできるだけ取る	75
大脳生理学を学ぶ	79
リーダーになるときの心がけ	85
営業マンに望むこと	88
会社生活をしていて役立った教訓	96

目次

運のよくなる一〇か条	110
私の会社像について	115
会社の論理過程と論理思考	118
営業部門の論理展開	124
スポーツ分野での論理展開	131
目標達成は思考力できまる	139
強いチーム、強い会社をつくるには	144
監修の言葉	150
あとがき	152

不確定時代にどう生きるか



(21ページ参照)

いきなり大上段に構えるようですが、みなさんはいまの世の中の流れ、あるいはトレンドをどのように捉えていらっしゃるでしょうか。

地球温暖化対策は、世界中の国々にとって全力で取り組むべき重要な、喫緊の課題です。CO₂などの温室効果ガスを相当程度減らさないと、異常なペースで進む海面上昇によって海抜〇〜一メートルの地域は海に沈む危険にさらされている。イタリアのベニスやオセアニア地域の小さな島国にとっては存亡の危機です。仮に海面が一メートル上昇すると、マーシャル諸島は国土の八〇パーセントが沈没すると予測されています。また、バン格拉デシュでは国土の一八パーセントにあたる二万六〇〇〇平方キロメートルの低地が沈むといわれています、これは岩手県と青森県を合わせた面積に相当します。

二〇一六年一月に発効した気候変動抑制に関するパリ協定のもとで、エネルギー供給と使用に関して、各国では温室効果ガスの排出量を削減する低炭素化の政策が強力に進められています。日本はパリ協定締結国による第一回会議に正式メンバーとして参加することが叶いませんでした。そんな中で、アメリカのトランプ大統領は「地球温暖化は国際協調主義者によるでっちあげだ」と批判し、世界第二位の温室効果ガス排出国であるアメリカは、二〇一七年六月にパリ協定からの離脱を表明しました。

離脱といえば、かたやヨーロッパでは、イギリスが未曾有の難民危機やテロの続発を受けて、開かれた国境という理想を掲げながらも統治能力、危機対処能力が欠如しているEUから離脱するようです。

資本主義の代表格であるアメリカとイギリス。両国は疲弊している、と私には映ります。ベルリンの壁崩壊以来、資本主義が文字通り世界を牛耳る時代になると思われたが、両国は勤勉な労働を忘れて金融経済へ走り、いまやトランプ大統領は強国主義を推し進め、ワシントンダードで世の中を治めようとしている。貿易政策についても自国ファースト。保護主義が台頭し、分断の時代に後戻りかとも言われている。商売は売る人、買う人だけが

良ければいいんだ、といわんばかりの発想ではないかと批判する人も多い。対中国をはじめとする貿易戦争はますます熾烈になっています。あとで詳しく述べますが、むかしの日本には「近江商人三方良し」という名言がありました。売る人、買う人だけでなく社会の発展や福利の増進に貢献してこそはじめて良い商人といえる。その精神を説いてあげたい気持ちにもなります。

離脱問題で揺れているのはパリ協定とE.Uばかりではありません。核不拡散条約からは北朝鮮が以前から脱退を宣言していますし、そもそも核保有国のインド、パキスタン、イスラエルは加盟さえしていません。イランと米英仏独中ロが二〇一五年に結んだいわゆるイラン核合意に対しては、トランプ大統領が「致命的な欠陥がある」と非難し、二〇一八年五月に合意を離脱してイランへの制裁を再開しました。さらに、トランプ大統領はロシアとの間に結んだ中距離ミサイル全廃条約の破棄を通告。これを受けてロシアのプーチン大統領も条約義務履行の停止を宣言しました。核拡散防止条約は機能停止に陥っています。また、日本が国際捕鯨取締条約からの脱退を通告したのは記憶に新しいところです。

ほかの問題や地域に目を移せば、中近東では、想像に絶するほどの民族対立と宗教戦争

が続いていて、虐殺や貧困のニュースがあとを絶ちません。中国は世界第二位の経済大国に上り詰め、今や世界は米中二強体制かと言われている。その中国は計画的経済政策のもとに“一帯一路”を進めています。シルクロード経済ベルトと二一世紀海洋シルクロードを使って途上国の開発をサポートするすばらしい経済圏構想です。ただし、低金利で経済支援をするという志はいいんですが、現地の人を雇わないで中国から人を派遣して仕事を進める。その国がお金を返済できないと、土地を含め港湾機能を全部没収すると新聞記事などに載っている。

いまだに領土拡大に意欲をみなぎらせているのが、その中国とロシアです。台頭する新興国との対立は一種の文明衝突にも映る。前記した北朝鮮の核の問題もそうした側面で捉えることもできるでしょう。こうした混乱をさらに複雑にしているのは何か、と考えると、さまざまなファクターが脳裡をよぎります。インターネットによる過度の情報化。データの時代、米国、中国IT企業の巨大化。過度のデジタル化と数字偏重。過度の標準化と偏差値万能。これにムーデイズやスタンダード&プアーズといった国際的な会社格付け機関の台頭による株価第一主義も含まれるでしょう。まさしくグローバルな不確定時代とい

つていいのではないのでしょうか。

こうした世界の動向を考察すると、私は次のような九項目がキーワードになるのではないかと考えています。

(1) 第三の道

資本主義か社会主義か、という二者択一の時代ではもはやありません。これからどういう道を歩めばいいのか。第三の道というのを世界各国が模索しているような状況だろうと思います。

資本主義のトップであるアメリカとイギリスが疲弊してしまっただけではなぜでしょうか。いろいろな見方がありますが、やはり金融経済へ走ったことではないかと考えられます。語弊があるかもしれませんが、金融というのは人のお金を右から左へ移すことによつて金利で儲けていくシステムです。いわば、汗をかかないで済む商売。労働、雇用ということを忘れてしまっている。アメリカとイギリスはそういうぬるま湯になじんでしまったのではないか。また、自由、民主主義が独裁、大衆迎合主義（ポピュリズム）に揺らいでいる。一方で、社会主義国家の統制経済はどうでしょうか。計画的に都市開発を進める上では、